

## 書物の災難

教授 浅見直一郎  
(東洋史(中国中世史))

十年以上も前、大学のコラムで「七難」という語について執筆したことがあった。七難はもともと仏教語で、種々の災難・困難を言う。その具体的な内容は經典により異なるが、その中で火の災難と水の災難とは、表現の違いこそあれ、どの經典にも共通して挙げられているようである。

人生に災難があるように、書物にも災難がある。書物はたいてい紙でできているから、火であれ水であれ、物理的な災難がふりかかればひとたまりもない。

中国は書物の国であり、昔から多くの蔵書家・愛書家があったが、その一方で戦争も多かったから、書物が蒙ってきた災難もまた並大抵のものではなかった。その多くは火による災難であって、有名な例を挙げれば、アロー戦争中の1860年、北京郊外の円明園内に設けられていた書庫・文源閣の四庫全書が、英仏両軍の攻撃によって灰燼に帰している。

7世紀に成立した『隋書』経籍志は、漢籍の標準的な分類方法である四部分類を確立したことで知られているが、その序文には中国歴代の王朝が書物の収集に努めてきたこと、繰り返される戦乱のたびにそれが無に帰してしまったこと、が具体例を挙げて延々と述べられている。日々、孜々として書物の整理に従事しておられる図書館の関係者には読ませ



たくない文章なのであるが、そこに大規模な水難事故が一つ、記録されている。

唐の武徳五年(622)のことである。長安に拠る唐王朝は、洛陽を拠点としていた敵対勢力の鄭国を打ち破り、その図書館にあった書物と書の名品を、司農少卿の宋遵貴に命じて船に載せ、黄河を西にさかのぼって長安まで運ばせようとした。ところが、難所として知られる底柱山を通過しようとした時、難破して多くの書物が水中に没し、残ったものは一、二割にも満たなかった、というのである(『隋書』卷32)。

武徳五年といえ、まだ隋末の混乱が完全には収まっていない時期であり、また責任者となった司農少卿とは今の農水省の次官といった役どころで、およそ書物の管理には関係がない。想像をたくましくすれば、食糧を運搬する仕事があり、そのついでに運ぶよう命じられたのかもしれない。いずれにせよ、

十分な準備のもとに実行された仕事とは言い難く、書庫を充実させることが王朝の威儀を整える上で必要であったという事情があったにせよ、もう少し世の中が落ち着いてから移送すればよかったのに、と思う。もったいないことをしたものである。

さて、この『隋書』経籍志には、王朝の書物収集に関する興味深い話が載っている。隋の開皇三年(583)、秘書監・牛弘の提言により、各地に人を派遣して稀覯の書を捜させ、それに応じて提出した者には書物一卷につき絹一匹を賞与し、校訂・筆写が終われば本はもとの持ち主にすぐに返すこととした。これにより、民間にあった書物が次々に現れた、というのである。ひょっとしたら、記録には残っていないけれども、他の王朝でも似たようなことを行なっていたのかもしれない。なお、秘書監とは、国会図書館長と公文書館長を兼ねたような役職だが、政府内での地位は非常に高く、今の日本で言えば閣僚級である。王朝政府にとって図書館がいかに重要であったか、この一事が雄弁に物語っていると言えよう。

ところで、いつの時代にも悪賢い人はいるもので、この時、劉炫という学者は百余巻の書物を偽造して『連山易』とか『魯史記』などというもっともらしいタイトルをつけ、政府に提出して賞金をだまし取ったという(『隋書』巻75)。今でいう研究不正と給付金の不正受給とを同時に行なったわけで、学者の風上にも置けぬ人物である。今このようなことをすれば、研究者生命を絶たれることはもちろん、公職にあれば懲戒免職を免れないであろう。実際、劉炫も訴え出る人があって悪事

が露見し、死罪に処されるどころであったが、後ろ盾になる人物でもいたのか、赦によって死を免れたのみならず、数年後には復活して律令の改定に携わったりしている。

ここで思い至るのは、偽書が作られる背景として、このような王朝による書物の収集事業があるのではないか、ということである。偽書とは、著者、成立の年代や事情などを偽っている書物であり、地域・時代を問わず存在する。中国で最も有名なのは、古典中の古典、『尚書(書経)』の本文の一部と、前漢の学者・孔安国が著した(とされてきた)『尚書』の伝(注釈)とが偽作であった、という件であろう。劉炫先生の偽作がすぐにバレたのとは違い、こちらは偽作されたのが晋代、偽作と証明されたのが清代であるから、千数百年の間、人々を欺いてきたのである。

書物が偽作される理由としては、虚栄心、家系の粉飾、などが挙げられようが、王朝が報奨金つきで民間に書物の提供を呼びかけたことが時々あったとすると、賞金稼ぎが目的で古い書物を偽作する輩が、劉炫のほかにもいた可能性は大いにある。そのようにして生み出された書物は、素性が露見した途端に偽書の烙印を押されるわけで、これもまた書物にとっては災難と言えるかもしれない。

最後に、復活を果たした劉炫のその後であるが、学者として活躍した後、晩年になって戦乱に巻き込まれ、郷里の町の城壁の外に閉め出されて凍死している。